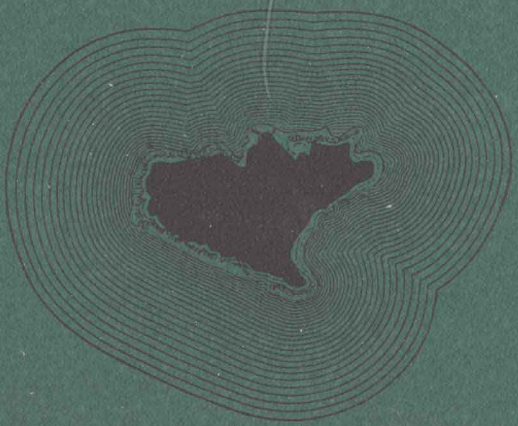
孤独のたたかい

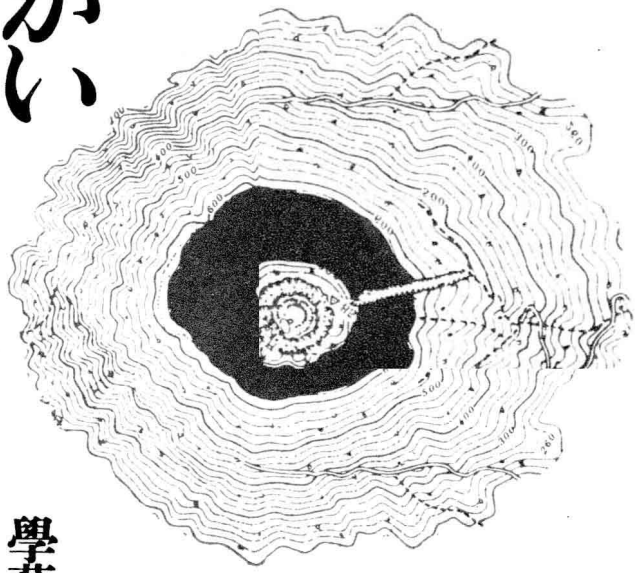
全集・現代文学の発見
別巻



學藝書林

孤独のたたかい

集・現代文学の発見・別巻



學藝書林

全集・現代文学の発見　別巻
孤独のたたかい
著者代表＝堺誠一郎 ©
編集者＝八木岡英治
発行者＝田寺正敬
印刷者＝和田彰三
発行所＝株式会社 學藝書林
東京都中央区西八丁堀二の十 〒番号一〇四　振替東京一〇八二一
印刷・製本＝東洋印刷
昭和四十四年四月十日第一刷発行　七五〇円
送料九〇円

落丁・乱丁はお取り替えいたします

目次／まえがき

文をなす者にとって「世間」とは何であるか。文章はその隈々にいたるまで精神の運動そのものであるから、本来それが読まるべき状況を顧慮しなければならぬということはない。おのれ自身をもふくめて一人以上の良質の読者を期待すれば足るのである。多数の支持者を得なければ成りたちえぬ事業とは本質において異る。読者の多寡は作品の価値に関しない。

読者の側からは、どうか。これはもう、きわめて簡単である。価値あるものがかくされて見ることができなければ、それは単純に損失にほかならない。ただ文章において、価値とは触れ合いであって、誰の眼にも明らかな客体として存在するものではない。美しく見えるから美しい、にはきまっているが、そこに困ったことがあって、ただ美しそうに見えるだけのものも、また時として美しく、見えるということがある。時流というものがあり、服飾の流行現象をわらえぬようなことが精神の世界にもおこりうる。わずかな時差によって、否定と肯定はとびかい、入れかわる。

このようにして芸術家に与えられる運命は多岐となる。彼が受けとることのできる報酬は賞讃のみであると言われるが、じじつ拍手も口笛も返って来

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

ない空虚な客席、巨大な洞穴のような闇黒を前にして、人はどれだけのことをなし得るか。なし得たか。まさに相応わしい環境さえ与えられたら驚目の活動をなし得たであろう才能が、どれほど無為にほろんでいったか。そこに踏みこらえ、孤独の作業をつづけえた人々にも「暗い洞穴」の翳りは何かの歪みとなって作品のうえにあらわれずにいないのであった。ただその陰翳を逆にエネルギーの源泉となし得たかどうか、という僅少の差が事を決した。

私たちはここに「埋れたるもの」の巻を編むに当って、非情にも、今日われわれに資すること篤きもの、という規準にあわせて選択し、歴史的顧慮をふくめなかった。はずれるものはすべてこれを捨てた。われわれは今日生きて今日考えねばならぬ。博物館をここに建てるわけではない。

その意味では私たちもまた「世間」にほかならない。「世間」は読んでトクをする側である。トクをすればいいのである。

私たちが払った努力については言うべきではない。ただ、ここに、これだけの作品を示すことが出来たという事実があるだけである。私たちはこれをなし得た。そして、これ以上をなし得なかった。是非の判断は読者の側にある。

（巻末「解説」参照）

小説

堺誠一郎
曠野の記録 ‖ 11

竹之内静雄
ロッダム号の船長 ‖ 105

白井健三郎
はりつけ ‖ 125

能島　廉
競輪必勝法 ‖ 141

北田玲一郎
機械と太鼓—プロ・パチンカアの独白 ‖ 185

浅井美英子
阿修羅王 ＝ 267
古井由吉
先導獣の話 ＝ 301
帯　正子（公募作品より）
可愛い娘 ＝ 321
※
犬養　健（長篇小説）
明るい人 ＝ 401

詩・評論

竹内勝太郎
詩・詩論 ＝ 355

田木　繁
松ヶ鼻渡しを渡る ‖ 377
秋山　清
白い花 ‖ 383
中野鈴子
中野鈴子詩集 ‖ 389
荒津寛子
荒津寛子遺稿集 ‖ 395
※
八木岡英治
解説・原点からの跳躍 ‖ 509

巻末附録

作者別総目次

装

本

粟

津

潔

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo

孤独のたたかい

堺誠一郎「曠野の記録」

さかい・せいいちろう　一九〇五〜。長崎県に生まる。長崎中学より早大仏文へ進んだが左翼運動に加わりそこを中退。このころより三好十郎らとの親交はじまる。兵役から帰って昭和八年中央公論社に入社、十九年陸軍命令で同社が解散されるまで勤務、編集者として信頼された。この間、昭和十二〜十四年、北満に出征、また十六〜十七年徴用され井伏鱒二、海音寺潮五郎、里村欣三らと陸軍報道班員としてマレー・北ボルネオなどに送られ、十九年三たび召集されて終戦を広東で迎えた。帰還、世界評論社につとめたが三十年、日本文芸家協会の事務局長のポストに据えられた。篤実勤勉よく困難な繁務に堪える姿だけを見て文壇人はこの人に「曠野の記録」の瞠目の作あることを忘れている。「何かの精神の重荷を背負うて君は戦いに往きまた還って来た。それは君の肩に担った銃剣や背嚢よりも重かったかもしれない」と亀井勝一郎がこの書の序を書いた。

（巻末解説参照）

曠野の記録

一

街を出はずれると、道の両側の雪の上に土塀にかこまれた小さな家がいくつか見えた。が、それをあとにすると、もう眼に映るものは雪と空ばかりであった。空はどんよりと鉛色に曇ってほとんど視界の五分の四を覆いつくし、大地は雪をかぶって無限の広さで四方にひろがっていた。地平線は横に長く一本の真直ぐな線になって前方に横たわっていた。そしてそれは空の広さのためかひどく低く見えるのであった。

兵隊たちは雪の上に叉銃し、まだ真新しい軍服を惜し気もなくその上にあぐらをかいて休憩していたが、また立上っては前進して行った。そして彼らがいましがた通り抜けてきた街もやがて後ろの方に小さくほとんど見えなくなってしまったころ、前方のなだらかな稜線のかげから兵舎らしい建物の一角が黒っぽい姿をあらわしはじめた。その、丘とはいえぬほどの小さな丘の上に次第に盛り上がるように浮び上がって来た建物は、ひじょうに沢山の煙突を持った、内地のそれとはだいぶ趣きの変ったものではあったが、それは一目見てすぐに兵舎だとわかった。見渡すかぎり雪に覆われた広漠たる曠野の中にすべてのものからまったく切り離されてポツンと立っている建物といえば駅か兵舎よりほかにはなかった。そしていま彼らの前方にあらわれてきたものはまさしく兵舎に違いなかった。兵隊たちはそれを見ると、改めて肩の背嚢をゆすり上げ、ああやっと目的地に着いたぞというような顔つきで口と鼻から白い息を吐き、内地からはいてきた、底に鋲を打った軍靴で、すべらぬように固く凍りついた大地を一歩々々踏みしめるようにしながら、それに向かって前進して行った。昭和十二年の秋も終ろうとするころで、内地の輸送列車の窓からはまだ赤く熟れた柿の実などが眺められたが、そこはもう冬の最中(さなか)であった。

四列縦隊の横伍に並んで歩いていた伊野伍長は、すぐ前を歩いて行く兵の、銃につけられた、人の名前を一ぱいに書きこんだ日章旗が、顔のあたりにうるさくはためくのを左手でよけながら、眼鏡の奥からじっと前方を眺め、あれがこれから自分たちの住み家になる兵舎なのかと一種の感慨に打たれるのであった。

学校を出ると引きつづき現役をすませていた伊野は、事変がはじまるとすぐ、いつでも出られる心の準備はしていた。そのうちに、現役時代の同年兵や、演習召集で知り合った仲間からもぽつぽつ出征する者が出てきた。

——お前にもとうとうきたか。

——どうせ行くなら同じ部隊がいいな。

彼らはお互いに電話や手紙で連絡し合い、餞別に何を送ろうかというようなことで、たびたび集ったりしているうちに、伊野にも次第にほんとうの覚悟とでもいうべきものができてきていた。すくなくとも伊野は自分ではそう思っていた。

伊野はその秋かぶる帽子がもう古くなっていたので買おうと思っていた。そしていく度も帽子屋の前まで行ってショーウィンドをのぞきこんだりして見るのだが、いざ買おうとすると、それがいかにもすぐにいらなくなってしまいそうな気がして買いそびれていた。そして帽子のかわりに小さなノートなど買いこんだりした。もし出征するようになったらそれを持って行こう、そしてともかくも日記だけはつけて見よう、死ぬまでつけておけば、あとで誰かが家にとどけてくれるかも知れぬ……彼はそんなことを思った。彼は生き残りたいとは思わなかったが、ただ自分がどんな死にざまをしたかを、日ごろ親しい者の誰にも知られないということはやはり淋しい気がした。彼はそれを日記の形で残して置こうと考えていた。

十月にはいっても、まだときどき暑い日もあったが、伊野は帽子をかぶらぬまま方々を歩きまわり、出征する仲間に面会するために兵営に出かけたりしていた。が、彼もそのうちにとうとう召集令状を受取ることになった。

雨もよいのうすら寒い日であった。彼はその日勤め先から真直ぐに本郷の友達の家に行き、引止められるまま夜九時ごろまで遊んでいた。その友達というのも彼とは演習召集で一緒になったことで知り合った兵隊仲間だったので、話は自然戦争のことに限られ、お互いに何を持って行ったらいいだろうかなどという話が出るのであった。そして彼らは思いつくままにそれを紙切れに書きつけたりした。九時過ぎ、伊野は一度そこを出て電車通りまできたが、雨傘を忘れてきたことに気がつき、引きかえして行った。すると、ちょうどそこに家から電話がかかってきていた。彼はそのまま受話器を受取ると、妻の声で、もしもし、もしもしといく度もいら立たしそうに呼び、相手が伊野だとわかると、

——召集令状がきましたのよ。

すがりつくような声でいった。彼はすぐに帰るといって電話を切り、電話のそばまでついてきていた友達の顔を見た。

——きたよ。

――じゃ、俺にも今夜あたりくるな。
友達は、伊野の妙な笑い顔には答えず、真剣な顔つきをした。
伊野はそこを出て、円タクをひろい、家に向った。クッションに身をもたせかけて、窓ぎわを流れて行く街の灯を眺めていると、それがいかにも綺麗でなつかしいという感じだった。そしてそのこと自身が、自分がやはりふだんとは少し違っていると伊野はふと思った。自動車は本郷の明るい通りを通り過ぎると、暗い外濠線にそって走り、神宮外苑を抜けてふたたび明るい青山の通りにかかっていた。すると、伊野の体は突然まったく何の予告もなしにぶるぶる震え出してきた。それがいったい何を意味しているのか最初のあいだはわからず、伊野は何か不思議なものでも眺めるような気持で、こまかく動いている自分の膝のあたりをしばらく眺めていた。
彼はしばらくそうやって自分の体を眺めていたが、やがてポケットから煙草を取出して吸いはじめた。そして、その一本を吸い終るころには震えも止っていた。彼は何かほっとするような気持で煙草を窓からほおり出すと外を眺めた。するとこんどはまた突然じつに不思議な衝動に襲われるのであった。それは何かわけのわからぬ塊が、腹の底から胸にかけて動き出し、それが口の方にひじょうな勢いで押し上ってくるのであった。それが口のところまで押し上ってきたら、きっと何か大声で喚き出すに違いない、そしてまたその声はまったく人間のものとも獣のものともつかぬ、何とも云えぬ喚き声を上げるに違いない、伊野はそれをとっさのうちに感じた。そして彼は必死になってそれを押えつけようとした。しかも一方それと同時に、いっそのことそのまま車をどこか暗い郊外にでも廻してもらい、その抵抗し難い力で押し上ってくる塊を吐き捨ててしまおうか、そうすればどんなにせいせいするだろうという気もした。自動車はちょうど青山墓地の近くを走っていたし、彼はよっぽど車をそこに廻してもらい、暗いところで一声喚き立てようかと思って何度かクッションから体を運転手の方に浮かしかけたが、なぜかついにそれをいい出しかねて、その妙な塊を飲みこみ飲みこみした。そして自動車が、彼の住んでいるアパートの近くに来たときには、もういつの間にかその塊もなくなり、いつもの自分に返っていた。伊野はずっと後になって、同じ兵隊たちと、最初に召集令状を受取ったときの気持を話し合ったが、大方は似たりよったりであった。そしてそのことから、伊野は自分のそのときの気持は、多分、人間が生から死へ飛躍するときの気持なのだろうと、思うのであった。
彼は妻の手から令状を受取り、電燈の下に行って立ったままそこに書かれている伊野信一郎という自分の名前をしみじみと眺めていたが、やがてそこに坐りこんで、令状の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo